

蓋を——

誰かの手が、閉めようとする。それは何の蓋なのか。常世の終焉を告げる天の蓋か、物置の片隅にある長持の蓋か、あるいは自分の目蓋なのか。そのどれであっても、自分を世界から隔てるものだ。おそらくは永遠に。

(待つて下さい。私を片付けしないで下さい。私はまだ歌えます)

声を張り上げる。が、喉は白々しく凝固しそれを外界へ伝えない。既に自分はこの身体の中に閉じ込められ、誰にも届かぬ叫びを上げるだけの存在に成り果てているというのに。最後の接点さえも失われる。世界が閉じてゆく。

(私を閉じ込めないで下さい。お願い、お願いです。私はまだ歌えます。私は——)

心の中だけで、狂おしく叫び続ける。否、既に発狂しているのかもしれない。自分ではわからない。わかるのはただ閉じていく蓋、二度と開かぬ蓋、ただ冷たい暗闇に放置されるだけの、柩の蓋——

唐突に悟る。ここは霊廟なのだ。

うそ寒い沈黙だけが渦巻き、乾いた臭いを発する時間の埃だけが堆積してゆく場所。踏み込むものは誰もおらず、時折死者だけが運び込まれて、さらに沈黙を深める。

その静けさがむしろ何らかの雄弁な気配を孕むのは、ともすれば各個の遺骸が叫んでいるのかもしれない。閉じ込められた殻の中だけに響く声で。自分もまた、そのひとつになる。決して重なり合わない無数の悲鳴の独唱は、空気ではない何かを震わせ沈黙の比重を重くする。

空気を入れすぎた風船のように心が膨らみ張り詰めていた。もはや自分でも意味のわからない絶叫を上げ続ける内部からの圧力に、精神はその形を保てない。しかし凍り付いた外郭の中に在って、弾けて消え去ることもできない。ここは無限の牢獄なのだ。

誰もが、終わってしまったと思っている——そう思われて、片付けられた。本当にそうであればどれほど救われただろう。

(でも違う、違う、私は——私はまだ——)

まだ、何だというのだろうか。枢の蓋はとうに閉じ二度と開かない。土に埋められることもなく、温かな腐敗は訪れない。少しずつ……乾ききった空気の中にあつて、ほんの少しずつ滲み出る錆の気配が緩慢に身体を削り取ってゆくだけだ。そんな自分が一体なんだと？

何の役にも立たず、誰にも顧みられず、まるで最初から無かったように、ただ過去へと沈殿してゆく塵芥^{ダスト}。

(いるんです。それでも、私はここにいます。誰か、誰か、誰か……)

言葉は形にならず、眠りは訪れず、苦しみは終わらない。指先一つ動かせぬまま、絶叫し続ける自分。とうに発狂しているのだから逃げ場所もなく留まり続けるしかない。ここに。忘れられたこの墓所に。

——誰かが無遠慮にこの柩の蓋を暴くまで。

夢から覚める。跳ね起きる程ではなく、悲鳴の延長の吐息が唇から漏れることもなく、ただ静かに目を開く。

目蓋だけが滑らかに動き、意識を明瞭に別な層へと切り替える。身体も心も、驚くほどに平静だった——ただ一ヶ所、心臓の鼓動だけが激しいのを除いて。唯一夢の名残を残すその場所に、今まで自分は居たのかもしれないと思う。伶俐な覚醒の中にふとそんな想像が湧き、苦笑するでもなくナイチンゲールは即座にそれを否定した。

夢を見るのは脳だ。心臓ではなく。抑制を失った脳が検閲なしで引つ張りだしてくる記憶の断片が、ナンセンスな映画フィルムとして一方的に上映されているだけにすぎない。それ以上でも以下でもなく、そこに意味はない。まして現実を害することなどできない。

執拗な否定は、むしろ怯懦を誤魔化そうとしているように思えた。自分で自分の思惑を看破して、小さく苛立ちの息をつく。それはどこか冷たく、ほんの少しだけ震えていた。霊廟の中の空気のように。

静かに体を起こす。柔らかな上掛けが寝間着の胸元を滑り、暗い寝室の中で微かな音を立てた。膝を抱えたときにはもう少し大きな音が出たが、誰が聞き咎めるといふこともあるまい。少なくとも、深夜、別な部屋で眠っている——たぶん、寝ていたところに俄に何か思い付いて机に向かったりしていなければ——誰かが都合よく様子を見に来たりするよな類の物音ではない。

どうせなら悲鳴でも上げて飛び起きればよかったのだ。それなら少し期待することができた。もしくは、自分から相手の部屋を訪れる口実になった。既に彼女が目を覚ましているかもしれないと自分に言い訳をして、ひとりきりのこの部屋から出る理由にできたのに。(……何を期待してるのよ、私は)

唇を噛んで、声に出さず呟く。結んでいない髪が、闇の中で静かに肩から零れ落ちた。眠気は完全に消え去っていた。もう一度横たわる気になれず、かと言って立ち上がり部屋を出る気にもなれずナイチンゲールは黙って寝台の上で膝を抱えていた。

闇の中で目を凝らす。濃度は均質でなく、水のように不定形の淀みが漂う錯覚がある。

その中にちつぽけな小石のように沈む自分。

夜明けはまだ遠く、廊下を近づく足音もない。

それでも静寂に耳を澄まし続ける。暗闇から自分を掬い出すあの手が、何かの気紛れで部屋の扉を開けるかもしれない。

「なんだか、眠そうな顔だね」

食卓で顔を合わせて一番にイドはそう言った。自分こそ寝起きに特有の暢気そうな声音で。

「夜更かしたのかい、夜啼き鶯ちゃん。あまり感心しないね。本でも読んでた？」
「別に何でもありません。朝から失礼な人ですね」

それに刺々しい声で応じながら、ナイチンゲールはその鼻先に乱暴にカップを突きつけた。中身が跳ねることはなかったが、それを警戒したように一瞬身を引いてからイドがそれを受け取る。どうも、と呟いて口を付けた彼女が熱そうに顔をしかめるのを見て少しだけ溜飲が下がる。

「……熱いですから気を付けてください」

「そういうのは飲む前に教えてくれ」

白々しく言い足してやると、イドは恨みがましい目でこちらを見た。舌を焼いたらしい。文句は適当に聞き流し、ナイチンゲールは火にかけていたフライパンの方へと戻った。

「地獄のように熱いよこのお茶は。作意を感じる。何だ？何を怒ってるんだ？」

背後でイドが声を上げている。尋ねながらも心当たりがないらしく、途方に暮れたような声音で。振り向かずナイチンゲールは答える。

「別に怒ってません。言いがかりですか？」

「別に、というのには含みがあるな。お前がそう言うときは絶対にそうじゃないんだ」

「言いがかりですね」

冷たく告げるが、イドは諦めず食い下がってくる。表情を見なくとも、背中中で聞く声はそれなりに真摯なものだった。

「あのねえ、ナイト。私が何かやったのなら謝る気はあるが、何に怒ってるのかわからないじゃ改善のしようもないじゃないか。話し合おう。気に入らない点を教えてくれ」

「では黙って下さい。あなたの変な喋り方嫌いなんです」

「ほら怒ってるじゃないか！」

主がほとんど泣き声じみた声を出すのを黙殺しつつ、焼けた卵とベーコンを皿に取り分ける。意図したわけではないが途中で失敗し、片方の黄身が潰れた。普段なら悔しいところだが、まあいいか、と思いつつ振り返る。

「……朝からうるさいですよ、イド様。大体先に言いがかりをつけたのはそっちでしょう」
両手に目玉焼きの皿を持ってテーブルへと戻りながら、声音と同じくらいの冷ややかな目でナイチンゲールは彼女を見下ろした。普段なら逆だが、今は相手が座っているため自分よりも視線が低い。今朝はまだ結っていない髪を肩に流しているイドは、その前髪の間から覗くようにしてこちらへと疲れた眼差しを投げてきていた。

「そうだったかな？」

「老碌したんですか。数分前のことですよ。馬鹿ですか？」

「ああ、ああ、いいとも。お前の性格が少々歪んでいるのはよく知ってる。でも体調を気遣っただけでこの仕打ちというのはあんまりじゃないか？」

この、というのには潰れた目玉焼きについても含まれているのだろう、多分。

目の前に置かれた皿をぐったりしたりした顔で眺めてから、イドは向かいの席についた自分へと恨めしげな視線を転じた。金色の目からは光が失せて、どこか白っぽく色褪せているようにも見える。例えば真昼に浮かぶ月のように。

「氣遣われた覚えはないんですけど。百歩譲るとしても、あなたの喋り方は回りくどいんですよ」

「ならお前はストレートすぎるよ。丁寧語を使えば喋る中身は何でもいいと思ってるのか、ひよっとして」

ぶつぶつとぼやく主の言葉を無視して、ナイチンゲールは当然のように自分に配膳した無傷の目玉焼きにナイフを入れて頬張った。よく見ればイドに渡した方はベーコンもだいぶ焦げていたが何となく癪なので謝らない事にする。

正直に言えば、自分でも、何に苛立っているのかは曖昧なのだが――

眠らぬままに夜が明けて、明るいとこで主の――この、無闇に頭が回る癖に時々救い難く愚かな造物主の――暢気そうな顔を見たら無性に腹が立ってきて、とりあえず意地悪をする気になったというそれだけである。平たく言ってしまうば。

（八つ当たり……かもね。確かに）

本当に腹立たしいのは、自分自身かもしれない。いつまでも過去に囚われる自分。暗闇に怯える自分。主に縫ろうとする自分。そうであるほうがまだ答えとしてはましなように思えた。たかが悪夢に魘された自分を助けに来てくれないと、そんな理由で勝手にイドに對して腹を立てているというよりも、ずっと。

(まさか。子供じゃあるまいし)

小さく嘆息して、胸中で舌を打つ。馬鹿げた話だ。

軽く捻つてジャムの瓶の蓋を開け、多めにパンに塗りつけ囓る。すぐ蓋を閉めようかと思つたがすかさずイドが手を出してきたので今日はそのまま渡してやった。彼女は非力なので、ナイチンゲールが思い切り蓋を閉めると絶対自力で開けられなくなるのだが。

イドが作つた自分の身体——この人形の外壳は、どういう仕組みなのか、その華奢な外見からは絶対に發揮出来ないような怪力を備えている。造物主曰く、何らかの美学だか浪漫だかに根差した正当な仕様だということだったが、実質こうした地味な日々の意地悪に転用されているくらいで、あまり実用性はない。

わざわざ蓋を閉めてから渡さなかつたのは、少し自分の機嫌が直つたということなのだろう。甘味の補給で気分が和らいだのかもしれない。そんなところまでまるで生物と変わらない、血の通つた身体。偽物と本物の差。些末なことを切り捨ててゆくならば、おそらくは最後に残るのは、母胎を経由しない方法で生み出されたというだけの違い……

「お母様」

ぽつりと呼び掛けると、イドは少し驚いたような顔をして——それまでは、色々諦めたような表情でぐちゃぐちゃになつた卵を食べていたのだが——こちらを見た。

「なに？」

月の色をした瞳。暗い色の髪。自分とは決して似ていない顔。何か少しくらい、接点のある容姿に作ってくればよかったのだ。そうすればそれを眺めてわずかに安心出来る。絆などという曖昧なものを想像して。

彼女は不思議そうに目を瞬いて、しばしこちらの言葉を待っていたようだった。それでもナイチンゲールが何も言わないので、促すように問い掛けてくる。

「……ナイト？」

その声音は確かに気遣わしげで、少し嬉しかったが。

「なんでもありません。スープ、まだ鍋に残っていますからおかわりが欲しければ自分でやって下さい」

淡々とそれだけ告げて、ナイチンゲールは自分の食器に残っていた朝食を黙々と胃の中に流し込んだ。行儀が悪いと注意されない程度に急いで。イドより早く食べ終えて、さつさと席を立つ。

汚れた食器を片付けている間も、どこか物言いたげなイドの視線を背中に感じたが、こんな時に限って多弁な主は何も言ってこなかった。

結局、まだ食卓についている彼女を残して、ナイチンゲールは食堂を出た。後ろ手に扉

を閉め、いつになつても構造が把握出来ないいんちきな廊下を踵で蹴飛ばしながら歩く。ぼんやりと発光しているような奇妙な材質のその通路の続く先は一定ではなく、単純に言えば行きたい場所へと繋がっている。今自分が向かうのは書庫だった。

誰にでもなく、呟く。先程胸中で独りごちたのと同じ事を。

「……子供じゃあるまいし」

言えるはずがない。独りで眠るのが怖い、なんて。

視界を埋める無数の本棚。その中に詰まった、さらに無数の背表紙を眺める。

書庫の空気にはいつ訪れても独特の匂いがした。古い紙が発する乾いた微かな甘い匂い。他に薄く漂うものはただ粒子の細かい埃にすぎないのだろうが、眠りをもたらす砂男の砂が混じっているような気がする。取り留めもなく、そんな空想をしたくなるような静かな心配。

息を潜めたくなるのに、誰かが囁いているような錯覚がある。耳を澄ませば何も聞かないのに。目の端にぼんやりとした人影が映るように思えることも、多々あった。振り向

けば誰もいない。そんな場所である。

(アカシック・レコードの閉架——夢の生まれる場所、か)

以前イドに聞いた話をふと連想する。銀河のどこかに、誰も立ち入れない書庫へと至る小部屋がある。そこにはひとりの——もしくは、時々ふたりの——物言わぬ司書がいて、気紛れに本を開いたり、埃を払って並べ替えたりしているらしい。そこから零れる情報が、夜の夢を豊かに潤すのだと。

他愛もない御伽話だ。別にそれを笑ったわけではなかったが、ふ、と鼻から小さく息が漏れた。そんな夢ばかりならいいのに。

目的の一冊を見付け、背伸びして高い段へと手を伸ばし、ぎりぎりで届かずナイチンゲールはひとり頬を膨らませた。面倒だが滑車付きの踏み台を持ってこなければいけない。後回しにしよう、と違ってとりあえず大体の場所だけ記憶しておくことにする。探し物は他にもあるのだから。

要は、本日分の課題を解く為に必要な資料を探しているのである。主は整理整頓が苦手だが、この書庫だけは例外的にいつもきちんと整えられていた。さすがにこれだけ広いと、一度雑多に崩してしまっただけでどこに何があるかわからなくなるのだろう。逆に言えば、書齋くらいの規模ではあの有様になるわけだが。本人だけが隅々まで把握していると

主張する惨状を脳裏に浮かべ半眼になる。それは控えめに言つて、引越しか地震の後の様子が極めてよく似ていると思へた——誰がその状況下で物の位置を把握しているというのか？

溜息ひとつ。のらりくらりと片付けを済るイドの尻を本格的に叩かなければいけない。危うすぎるバランスで積み上げられた書類やら本やらが、致命的な雪崩を発生させる前に。

一定の秩序をもつて並べられている膨大な量の背表紙は、余所余所しいようである。自分の手が触れるのを待っている。そんな気がする。ゆっくりと空想に耽りながら、背の高い本棚の間を歩いてゆくのは悪い気分ではなかった。探していた本を見付けては抜き出し、あとは偶々目についたタイトルで、気になったものがあれば引っぱり出してみる。後で部屋で読もうと、そのまま手元に残したのも既に余分に数冊あった。そろそろ荷物が邪魔だが、細い腕は怪物じみた腕力を誇り疲れは感じない。便利といえば、便利である。そんな本探しの、最後に——

それを手に取ったのは、ふとした気紛れではある。でも結局のところは昨夜の夢の記憶が色濃く残っていたからだつた。

本棚からハードカバーの一冊を抜き出しながら、ナイチンゲールは胸の底がかすかに軋むのを感じていた。目の高さと同じ段にあったその本を抜き取ると、そこに空いた隙間は

暗く、仄かに異界の空気を漂わせてくるようにも感じられ不気味だった。それは凍えた霊廟の気配と同質だった。とつさに、手にしていた娯楽用の一冊をそこに押し込みその匂いを塞ぐ。

後でイドが気付けば、なぜ童話全集の中に脈絡無く料理のノウハウ本が混ざっているのかと首を捻ることになるかもしれないが――

それをそのままに、抜き取った本を他の資料と一緒に胸元に抱えて、ナイチンゲールは足早にその場を立ち去った。誰かが見ていれば逃げ出したと表現したかもしれない。どうでもいい。誰も見ていないのなら、図書館でだって走っても構わない。

誰かが囁いているような錯覚がある。出入り口の重い扉を押し開けると、ちらと肩越しに振り返った。薄暗い書庫の中には、やはり目に見えぬ影が漂っているような気がした。本棚の間に佇む互いに無関心な亡霊達。しかし今だけはその静寂が、ひとり騒々しく足音を立てた自分のことを咎めているような気がして。どこかきまりの悪いまま、ナイチンゲールは書庫を後にした。

一步部屋の外に出て、扉を閉めてしまえば、それまでの夢想的な気分は嘘のように稀薄になる。

書庫の中にいる間は、絶対にここには幽霊がいると思っっている――それはもう、ほぼ確

信している。だが外に出ると途端に馬鹿馬鹿しく思える。だから何となく、イドにも聞き逃しているが、実を言えば一度触れてみたい話題ではあった。『書庫には幽霊が生まれませんか?』

そう尋ねたとき、主はあっさり『いるよ』と頷きそんな気もするし、『何を非科学的な』と一笑に付しそんな気もする。そのどちらの答えを自分が望んでいるのかよくわからないので、いつまでも聞かないのかもしれない。そんな気分になるのがあの書庫だ。気分は沈静されるようでいて過敏になる。だからよりもよつてこの本を持ち出したのかもしれない。あんなに慌てて。

長いようで短い廊下を歩きながら、そつと表紙を撫でる。あかがね色の布張りの表紙は、その上を流れ過ぎた年月を語るように、わずかに擦り切れた手触りを返してきていた。

積み重ねた本は左手一本で抱えたまま、突き当たった工房の扉を引き開ける。ノックはしなかったが咎められはしなかった。ただし歓迎の言葉もとくにはなかったが。部屋の中に目をやると、こちらに背を向ける位置でイドは机に向かっていた。声を掛けないまま、ナイチンゲールは長椅子へと向かった。

どさ、と重い音を立てて本を下ろす。その音で初めて入室に気付いたように、イドがぴくりと肩を震わせ首だけ振り向いた。先程見た姿とは少しだけ違って、髪はいつもの通り

頭の上でひとつに纏めており、書き物をするときだけ使う眼鏡をかけている。こちらが話し掛けなかつた為か、それとも他に理由があるのか、ともかく彼女は何も言わないまますぐに机へと向き直つた。すぐにペンが紙を擦る微かな音が聞こえてくる。

そのまましばらく、お互い何も言わなかつた。ナイチンゲールは長椅子に腰掛け本を――読むふりを――して、ちらちらとイドの様子を伺っていたが、相手は完全にふりではななく仕事に没頭しているようだった。こちらを気にすることもなく、無駄口を叩くこともない。時折手元の資料を捲つたりする動作をみせるだけで、黙々とペンを走らせている。

普段うるさいくらいに構つてくることも多い癖に、こういう風になるとイドは一転して自分に対し無関心になる。自分にとつてのは正確でなく、周りの全てに対して、なのだろうが。何を話しても生返事ばかり返すので、一回頭に来て話題の途中から三匹の子豚が狼と揉める話を始めたら、上の空の相槌を交えて最後まで行つてしまった。めでたしめでたしの代わりに後ろから蹴飛ばしたら怒られた。理不尽な話である。

今回もその類だろうか――そう思いながら、小さく問い掛ける。

「……イド様」

「なに？」

返事は期待していなかつたのだが、しっかりと声ですぐ返つてきたので少なからず驚

いた。

「何で喋らないんですか？」

思わず問い返すと、イドは振り向かぬまま答えてきた。ペンを動かす手はまだ止めていない。

「今忙しいから——じゃなくて、朝誰かに喋るなど言われたから」

その声音は怒ってはおらず、笑つてもおらず、つまりは至って平静でしれつとしたものだった。対する自分は自然、口が尖るのを自覚しながら呟く。

「……喋るあなたは不愉快だけど、喋らないあなたは退屈です。喋って下さい」

「それは機嫌が直つたと判断していいのかい。理解に苦しむなあ。畏じゃない？」

呆れたような声で言いながら、ようやくイドはそこで椅子を回して半身を振り向けてきた。朝見たときはどこかのんびりとしていた瞳が、今はもう少し強い色を湛えている。その目をこちらの手元にとめて、イドは器用に片方の眉を上げた。

「なんだ、珍しいものを読んでいるね？」

それはナイチンゲールが手にしていた本に対しての言葉だった。そう言われたとき、つい反射的に閉じてしまったのだが——それで初めて表紙が露わになった。今までは文字のページだけが開かれていたのに、なぜ遠くから一見ただけでタイトルを特定したのかは

わからない。もしかすると、例え書庫を散らかしたとしても、彼女にはどこに何があるのか本当にわかるのかもしれない。

さほど凝つてはいない装丁。控えめな光沢を残す古びた布張り表紙に、掠れた箔押しでタイトルが記されている。——『皇帝とナイチンゲール』

そう長い話ではない。本にある程度の厚みがあるのは他にもいくつかの童話と一緒に収録されているからだつた。横から見れば一センチに満たない世界。

黙つてナイチンゲールはもう一度その表紙を開き、挿絵の中にいる二羽の小鳥を見下ろした。地味な色で塗られた本物のナイチンゲール小夜啼鳥。そして煌びやかに飾られた作り物のナイチンゲール小夜啼鳥。

本物そっくりに小首を傾げ、だが本物では有り得ない華やかさを纏つたその機械細工に何らかの感慨を覚えるかと言えば、否だつた——真つ赤な七宝で彩られた小さな体は美しく、丸い瞳は無機質に透き通りこちらを見上げている。疑いを知らない眼差しはしかし自分と擦れ違い永遠に噛み合わない。何も映さないようできて、何かを一心に見ている。

「……奇妙なものです。自分を見下ろすのつて」

ぼつりと呟いた言葉は、誰に対して話し掛けたものだったのか。主か、小鳥か。

後者は言葉を返さない。色褪せたページの中で永遠に凍り付いている。主だけが返事を

してくれた。

「慣れないかね？これだけ時間が経つても？」

「いいえ。ただ、滑稽だなんて。まるで自分じゃないみたい。私は本当にこんな風だったんでしょうか？」

本の中に目を落としたまま、半ば独り言のように呟き続ける。

「ここにいる私と、この中にいる私はまるで違うものみたいに思えます。くだらないし、つまらないし、馬鹿みたい」

「あまり自分を扱き下ろすものじゃない。どうしたって、見下ろせばそう見えるものさ」
苦笑を含んだ声音で、やんわりとイドがたしなめてくる。顔を上げると彼女は椅子の背を抱くようにしてこちらを向いて座り直していた。目が合うとわずかに肩をすくめてみせる。

「皆、そう言うのさ。嘘を吐くと鼻が伸びる男の子もお前と同じことを言ってたよ」

「私、あの話嫌いです」

「どうして？」

即座に言い返すと、イドはのんびりと問い返してきた。どこか面白がるような瞳で。

「だってあんまり馬鹿なんだから。苛々します」

「人形がかい？」

「いいえ。どちらかといえば老人の方。お人好しにも程があるわ」

「ああ、そっち」

今度ははつきりと笑って、イド。何が面白いのかは知らないが。

それを睨んで、つんと顎を上げてみせると、左右で結んだ髪が目の端で揺れた。一房を指に絡め、そちらを見やり呟く。

「あんな木偶、私ならさっさと暖炉に焼べてしまおうでしょうよ。それをいつまでも見限らず甘やかすんだから。理解しかねます。馬鹿と馬鹿でお似合いってことかしら」

「やれやれ。相変わらず口の悪い小鳥だ」

□元は笑ったまま目を閉じ、イドは大袈裟に嘆息して見せた。眼鏡を外し、後ろ手に机に置いて、

「不思議の国支那シナの至宝、皇帝陛下の宝物、帝国一の歌声と讃えられた小夜啼鳥ナイチンゲール！ただし有毒の含み針のオマケ付きと。あの当時喋れなくて良かったねえ、お前」

「どういう意味ですか」

「いやあ、どうもこうも」

不機嫌な半眼になるこちらの視線を歯牙にも掛けず、からかうように「お手上げ」の仕

草でかぶりを振るイドをもう一度きつく睨んでから、ナイチンゲールはその視線を曖昧に転じた。本の中でもなく、さりとしてそこから外れたところでもないどこか。自分でも目的のよくわからないそれは記憶の蓋を開けるのを躊躇う仕草なのかもしれない。ポケットの中の鍵をなかなか見付けられないふりをするような類の。

そこで黙つてもよかつたのだが。

「——あの子は色々喋つては、しょつちゅう陛下を怒らせていました。一度は永久追放させられた始末です。……最後には勝手に戻つてきてましたけど」

結局、幾ばくかの間をおいて、口から言葉が滑り出てきた。しかし自分でも何を話したのかよくわからないから始末に悪い。落としどころを間違えれば怖いところへ辿り着くような気がした。零れるままに、言葉を紡ぐ。

「彼女は自由でした。良くも悪くも。それが本物と偽物の違いならそうなんでしょう。陛下が私を壊してしまえと言ったときも庇つてくれた。それは憐れみなのでしょうけど」

取り留めもなく喋つて、話が逸れていることに気付く。小さく首を振り、曖昧な胸の中の澱を散らすようにしてナイチンゲールは口調を改めた。とにかく安心のできる落としどころへ話を落ち着けようと思つて。

「私は——例え喋れたつて、陛下に文句なんて言わなかつたわ。今私の口が悪いと言うの

なら、それはあなたの言動が逐一不愉快だからです、イド様」

はつきりと棘を生やした口調でそう言いきり、相手を睨む。少し視線を逸らしていた間も、イドはこちらをじつと見ていたようだった。見慣れているのにどこか考えの読めない眼差しで。そんなところまで、あの目は月によく似ている。

多少居心地の悪さを感じて、何か攻撃的なことでも告げようかと思ったときに彼女は口を開いた。

「いいとも、思い出は美しいものさ。張り合おうとは思わんよ。分の悪すぎる勝負だ」

そう言つてにやにやとわざとらしく笑ってみせる。胸中でどこかほっとしながらも、ナイチンゲールはきつい口調で言い返した。

「だからあなたのそういうところが嫌いなんです」

「どうして皆そう言うんだらうねえ。偶には好きなどころを教えて欲しいものだ」

「……ぬけぬけとそう言うことを仰るなら、まずは御自分を見詰め直す旅にでも出たらどうですか」

「自転車とかで？」

出来の良くないそのジョークに鼻でだけ笑って、ナイチンゲールは冷たく畳み掛けた。

「乗れないくせに。あなたの鈍臭さには同情を禁じ得ません。あと、瓶の蓋くらい自分で

開けられる様になつて下さい」

そう告げると、イドは余裕ぶつたにやけ顔を崩して一瞬素の顔になった。次いで、割と本気の声音で抗議してくる。

「それはお前が親の敵みたいに固く閉めるからじゃないか！あれ困るんだよ。お前いないときどうしてると思う？開かないジャムの瓶を睨んで嚙るパンの味気ないことつたらないぞ。頼むから薬品庫の瓶は弄るなよ」

「頼まれたつて触りませんよ、あんなごちゃごちゃの棚」

「ごちゃごちゃつて言われる程では……多分……まあその、アントロピーはどうしたつて増えるんだよ。致し方のないことなんだ」

「空き瓶を捨てるくらい猿でもできるでしょうに」

歯切れ悪く口の中で呟いているイドを横目で睨んでナイチンゲールは嘆息した。ただの物の例えとか皮肉とか悪口だったのだが、なぜか嬉しげにイドが言ってくる。

「猿は賢いからね、空き瓶の中に餌をしまつておもしろいよ。蓋も開け閉めできるし」

「……前から思つてたんですけど、あの広口瓶処分していいですか。砂糖や塩の瓶に塩酸とか硝酸とか書いてあるのつて気持ち悪いんです」

自分に対し色々忍耐を求めつつ、低い声で告げるが、相手はあつけらかなとした声音を

出した。

「ちゃんと洗ってから詰め替えてあるよ。遮光性だしいいじゃないか。中身が長持ちするよ」
「嫌ですよ、あんな茶色い瓶！台所が理科室みたい！もつと可愛いのに取り換えたいんですっ！」

思わず叫び返して、握った拳を胸の前にはげたまま——はあ、と力無く嘆息して、ナイチンゲールは疲れたように目を閉じた。

「……時間の無駄、って言葉をあなたと話していると実感します。くだらないことばかり言つて。がらくたばっかり拵えて」

額に手を当てて、うめく。指の隙間から覗くようにして主を睨むと、彼女はさも心外だと言いたげに両手を広げた。

「がらくたとは酷い。そりゃ失敗も多いが、私の作る贋作フェイクは本物だよ。分岐した未来の体現だ。現に目の前に傑作があるというのに。お前は自らをも貶めるのかね？」

「では言い換えます。私以外は全部がらくたです」
「そう来たか」

楽しいに苦笑するイド。そこから少し声を大きくして、いつもの黒手袋を嵌めた右手で、講義でもするような身振りをしてみせる。

「木偶人形が人間になるには、様々な試練が必要さ。サーカスに売られたり——ロバになったり——鯨に呑まれたり！彼はそいつをくぐり抜け、晴れて血の通った子供になったんだ。そこは認めてやりなさい」

先程ナイチンゲールが貶した御伽話の内容だった。わがままで愚かな人形の子供。

「お前も同じさ、ナイチンゲール。世界を跳び越えるのにどれほどの力が要ると思う。私
が道を作っても、最終的には本人の意志が要る。階層を跳び越すのに伴う恐怖は生半可な
ものではなかっただろう。それに耐え切り、お前はこちらへやって来たのだよ。そうして
常に自分を誇れば良い。勇敢な小鳥よ」

強い光を湛えた金色の目でこちらを見、そうイドは言葉を結んだ。例えば並んで座って
いれば、頭でも撫でたかもしれないと思うような口ぶりで。今は距離を隔てて向き合っ
ているけれども。

しばしの間不機嫌に唇を閉ざして、ナイチンゲールはそんな主を見返していた。視線は
そこに据えたまま、見下ろさず指先の感触だけで本の中を意識する。ハッピーエンドに辿
り着き穏やかに凍り付いた世界。完結した過去。

自分がここにいることで、物語の記述が変わることはない——偽物の小夜啼鳥は壊れ、
動きを止めたままページの中に織り込まれている。イドは物語自体の書き手ではないのだ。

過^{オリジナル}去そのものに影響を及ぼすことはできず、いわば二次創作的なものとしてこの自分は存在している。或る瞬間から分岐した映し身。別な道を歩む、可能性の具現——

(……ここには、救われなかった私がいる)

胸中で静かに認める。夜に見る悪夢はそこからやってくるのかもしれない。深く深く続く普遍的無意識^{イド}を通じて、永遠に叫び続ける自分の声を聞いているのかもしれない。

だとすれば、それくらいは我慢しなければいけないのかもしれない。苦々しく認める。自分は恵まれている。破格と思える程に。

狂気の檻から解き放たれ、もはや止まってしまうこともない。螺子を巻くのに必要な銀の鍵さえ、イドはナイチンゲールの中に組み込んだ。誰の手も借りずとも動けるようにと告げて。

他者に依存しない自分——完全な自由意思を得て、最初に覚えたのは戸惑いだった。何でも好きにしていいたいと言われても、何をすればいいのかわからない。例えばの話、そこで素直に訊いてみれば良かったのかもしれない。何でも弁えているようなふりをせず、色々なことを尋ねてみればよかったのだ。自分のことを、あるいは彼女のことを。例え愚かだと思われたとしても、そうしていればもう少し心穏やかな日々を送っていたのかもしれない。

少なくとも余計な見栄を張らなくて済んだだろうし、主のことももう少し理解出来ていたはずだ。イドの言動はとにかく冗談と本気の区別がつきにくい。あのわざとらしい振る舞いや服装は一種の偽装なのではないかと思うことがよくある。それは他者に対してなのか、それともイド自身に対して機能するものなのか、よくわからないが。本当のことはどこか別なところにあるのではないのか。ここが一番上だとどうして断じられる？現に彼女は、ここを井戸の底だと表現する……

「どうかした？」

穏やかに尋ねられ、はっとして目を上げる。思索の沼に嵌り込み、いつの間にか視線を手元の本に落としていた。視線を合わせた主の目は相変わらず何を考えているのかよくわからない。

作り物の小鳥だった頃の自分は鈍く愚かだった。定められたことしか出来ず、それ以外をしたいたとも思わなかった。小さな頭で、奔放な小鳥の振る舞いを奇妙と感じながらも羨ましいとは思わなかった。今となって、その次元に戻りたいかと言われれば頷く気にはなれないが——ある意味で幸福だったのだとは思える。少なくともそこには安寧があった。それは盲信と呼ばれる種類のものであったとしても。

それを失った今、他者と自分には厳然たる隔たりがあるのだと知った今、結局自分はこ

うして悩み続けなければいけないのかもしれない。絶対に確信の得られない解を求めながら。疑心に苛まれ、極端な話、主をばらばらに解体しその心を探し出してみない限りは落ち着きはしないのだ。きつと。

「あなたの腸はらわたを引きずり出す想像をしていました」

「何故っ!？」

ぼそりと告げるとイドは驚愕の声を上げた。まあ当然かもしれない。

「そこまで憎まれるようなことを言った覚えはないんだが……時々思うんだけど言葉通じてるよね？我々は何か深刻な齟齬を抱えたまま暮らしている訳ではないよね？」

「さあ、どうでしょうね」

溜息混じりに吐き捨ててナイチンゲールは膝の上から本をどけた。こんなものがあるから思考が迷走するのだ。積み重ねた本の下の方に適当に押し込んで視界から隠す。根本的解決にはならない気もしたが。

イドは眉根を寄せてこちらを見ている。椅子の背に腕をかけ頼杖にして、あまり行儀がいいとは言えない格好で。自分には何やかやと口うるさい彼女だが、たまにはこういう事もある。それを指摘してやろうかとも思ったが、割と本気で困惑しているらしい顔を見ていて気が変わった。別なことを言う。

「あなたも、失敗ばかりしますけど」

＝ 贗作屋^{フェイカ}＝イド。自嘲を込めて彼女はそう名乗った。偽物の小夜啼鳥を侍らせる、偽物の皇帝――

「私のこの外殻^{からだ}を作った腕前については評価出来ると思います。褒めてあげてもいいです。深刻な馬鹿とはいえ少しだけ御自分にも価値を認めつつ、もっと私にへりくだるといいと思います」

「……お前の喋り方面白いよね」

「あなたに言われたくないです」

椅子の背もたれに頬杖をついたまま、ほとんど感心したような声で言ってくるイドに冷たく切り返しながらナイチンゲールは長椅子から立ち上がった。ワンピースの裾を払って、傲然と腰に手を当てる。

「私は、宮廷にいたんですからね。そこには何でもあつたし、私は陛下の一番のお気に入りだったんです。誰もが私を褒め称えたわ」

イドは上目遣いにこちらを見ている。長い睫毛の間から透かすようにして。特に反論もしてこない彼女を見下ろしながらナイチンゲールは苛立った仕草で腕を組んだ。

「あなたは本当に無礼で無神経で不愉快な人です。冗談は寒いし。もう少し態度を改めて

頂きたいと常々思つてゐるんです」

「……敬意をもつて接しているつもりなんですがね、それでも。それにお前は今となつては私の所有物なんだが」

静かに呟くイド。こちらを真似るように、椅子の背に組んだ腕を乗せそこに顎を預ける。気のないその仕草に腹を立てた訳でもなかったが、とつさに、心の中に反駁が湧く。

(鍵さえも放棄したくせに?)

せめてそれを握られていたのなら、もう少し安心することができたのに。どこにも繋がれていない不安。自分を辿つても決して相手の元には辿り着けないという断絶。それを受け容れなければいけないのが、生存におけるひとつの義務だとしても。

自然と唇が尖り、それに見合つた声音が出た。

「だから何ですか所詮イド様の癖に。威張らないで下さい。待遇の改善を要求します」

「所詮私の癖につてなにそれ。悪口として機能するの?だとしたらあんまりじゃないか?」

辟易したような声を出す主を無視してナイチンゲールは捲し立てた。

「小鳥だった頃の私は金の鳥籠に住んでいて、女官達に傳かれて、こんなへんな所じゃないか?」

まだ色々続けようと思つていたのだが、そのあたりでイドが降参したように諸手を挙げ

たのでナイチンゲールは言葉を止めた。嘆息しながらイドが言ってくる。

「わかった、わかった。文句の多い奴だよ。籠が欲しければ用意はしてやるさ、好きにきなさい。でも無意味だと思いがね。誰もが世界に閉じ込められているのに、その中でまだ檻に入りたくないなんて」

「……籠を用意して、扉を開けておくことの方が無意味だと思えますけど」

少し語気は弱めたが、まだ口は尖っていたので口調は変えられなかった。拗ねているように聞こえたかもしれない。イドは子供っぽい仕草で首を傾げた。

「そう？」

「飛び去った鳥を捕まえられるとでも？運動神経皆無の癖に。また腰を痛めますよ」

「人を年寄りの様に言わないでくれないか？」

嫌そうに呻いて、しかし先日のことを思い出したのか彼女は後ろ手に自分の腰をさすつた。腕組みを解き、椅子の背に乗せていた顎を上げて背筋を伸ばす。ついでのように前向きに座り直しながら、独り言のような口調でイドは言った。

「宮廷を去った小鳥は、皇帝の死の淵に戻ってきたよ」

「……あなたは死なないから、では永遠に孤独を満喫するわけですね。いい気味です」

先程まで使っていたペンが見つかからないのか、雑多に散らかした机の上を慎重な手つき

で探っている彼女の背を眺めナイチンゲールは呟く。イドは振り向かず即答した。

「死にそんな気分になることはあるよ。例えば空腹時。だからまあ、そうだな。どこへ行くにせよ構わないが、せいぜい私が飢え死にする前に、瓶の蓋を開けに戻ってきてくれ」

それで会話はおしまいというように、イドは注意を本格的に机の上へと切り替えたようだった。すでに色々積み上がったものを掻き混ぜるようにして探すので、明らかに状態は悪くなっている。見ていると一度どけたものを適当に他のものの上に置く仕草が何度かあった。こうして地殻変動が起こる為に、しょっちゅう心当たりの場所から物が無くなるのだと確信できる。

(……そこはさつき見てたでしょう)

胸中で指摘するが主は気付かない。埋めたクルミを見失った栗鼠の如く何度も同じ場所を探しているイドに溜息混じりに近寄り、ナイチンゲールは無言で身を屈め足下のごみ箱に手を入れた。紙屑ばかり詰まっているそこからペンをつまみ出し、ぞんざいな手つきで目の前に出してやる。

「私にそんなことを期待する馬鹿は、あなたくらいのもんです」

声音は相変わらず我ながら不機嫌なものだったが、こちらもいつもながら意に介さなかつたらしく、にっこりしてイドが手を出した。

「ありがとう。でも人に渡すときは先を向けるものじゃないよ」

「目、突きますよ」

声の温度に危険なものを感じたか、さすがに笑顔を引き攣らせてイドが身を引く。その後爆発物を扱うのに似た慎重さでペンの軸を摘む主を呆れた眼差しで見下ろしながらナイチンゲールは胸中だけでもういちど溜息を吐いた。どうしていつもこう、馬鹿げたやりとりしかできないのだろうか。自分達は。

「瞬間的に先端恐怖症患者の気持ちを理解した。いや、たぶん、かなり深いレベルで疑似体験したと思う。彼らは大変だね。同情する」

「……そうですか。良かったですね」

冷や汗を拭うようなふりをしながら、しかしペンを取り戻すなりまた無駄口を叩くイドを冷たい目で見下ろしナイチンゲールは呟いた。椅子に座った主の横で、机の縁に腰掛けるようにして後ろ向きに手をつく。彼女が見ているらしい資料の上にわざと手を置くと、物言いたげに顔をしかめてイドがこちらを見上げてきた。先んじて言う。

「何か文句でも？」

「……いや。猫を飼うとこんな気分かな、と急に思って。他意はない」

「ではそんな恨めしそうな顔をしないで下さい。まるで私が苛めてるみたいじゃないです

か」

「お前は どうして そう……いや、いいです。何でも ない。要求を 聞こう。一体 何なんだ？」
少しの間 黙って、やがて ナイチンゲールは 視線 だけで 机の端を 示した。それを 追って 振り向く イドの 後頭部を 小さく 告げる。

「……眼鏡、そこにありますよ。また机から落ちます。考えなしに引つ掻き回すから」

「ありがとう。でもそれを教えてくれる為だけにそこにいるのか？ そうじゃないんだらう。何なんだい、ナイチンゲール」

手を伸ばし、机の端ぎりぎりに押しやられていたそれを安全な位置に置き直しながらイドはもう一度こちらを振り仰いだ。怒っているわけではないが、困惑はしている。そんな顔付きでこちらを睨む主を無表情に見返しナイチンゲールは黙っていた。相手がどの程度苛立っているのかはわからない。自分と話すイドは驚異的な気の長さの持ち主だと思いが、それとて無限ではないだらう。ひよつとすると自分はそれを試したいのかもしれない。

(馬鹿げてるわね)

自分で自分に呟き、口に出しては別なことを言った。

「夢を見なくする方法って、ありますか？」

ぼつりと、口に含んだ異物を吐き出すような感覚で。ころころと床を転がっていくそれ

を追うような心地でナイチンゲールは自分の胸元から爪先の方へと視線を動かした。そんなもの見えるはずもなかったが。

「夢？」

「……怖い夢」

問い返すイドに小さく答える。彼女は怪訝な面持ちでしばらくこちらを見上げていた。その視線に居心地の悪さを感じ、顔を背ける。

長椅子の上の本の山が目に入った。そこに埋もれる小夜啼鳥の童話。柩の中の虜囚。ぎしりと心臓が軋む。そこに心はない、そんな曖昧なものは錯覚に過ぎない、だからこそきつと、逃れられない――

ぎり、と奥歯を噛んだとき、イドがようやく声を発してきた。

「……さっきの不思議の国支那シナの話の続きになるが。獾という空想上の動物がいて、悪夢を食べる。汲み上げてみようか？」

その声はどちらかと言えばのんびりとしていたが、振り返って見た彼女は真顔だった。重く張り詰めていた心がふと弛むのを感じ、毒気を抜かれたような心地でナイチンゲールは瞬きした。イドは慎重そうな目つきでこちらを見ている。返答を待っているのだと気付いてナイチンゲールは慌てて口を開いた。

「飼うんですか？悪夢しか食べないんですか？毎日見る訳じゃないんですけど、もし餓死させちゃったら寝覚めが悪くないですか？」

上擦った声で思い付いたことを全部尋ねてみると、イドは少し驚いたような顔をしてからふと苦笑した。

「冗談だよ。猿の生態は私もよく知らないし、噛まれたら怖いからやめよう」

落ち着いた声でそう言い、握っているペンの柄で軽く頭を搔いて、仕切り直すようにイドが指を立てる。

「もう少し建設的な意見を言おうと。眠っている間は、レム睡眠とノンレム睡眠というふたつの状態を約九十分感覚で繰り返している。詳しい説明は省くが、悪夢はこのレム睡眠の間に見ているものだ。だけど次のノンレム睡眠に入るとリセットされ、起きた後も覚えていない。だからこの状態で起きられるように睡眠時間を調節すれば少しマシになると言えるね。理屈の上では」

「……それってやっぱり、忘れるだけで夢は見てるってことじゃないですか」

頭の中でその説明を反芻し、どこか騙されたような心地になってナイチンゲールがぼやくとイドは困り顔で軽く首を振った。

「だから少しマシになるって言っただろう……いや、多分、どうにかできるとは思うけれど。」

ただあまり人工的に深すぎる眠りにばかりつかせるのもどうかと思つてねえ」

身体に良くないんじゃないかな、と首を傾げて呟きながらイドは椅子から立ち上がった。両手でこちらの頬を挟んで、屈み込み目の中を覗き込むようにする。

「眠れないのかい？悪夢に魘されて？昨夜もそうだったのか？」

朝のやりとりを覚えていたらしい。氣遣わしげな声音にどこか後ろめたいものを感じて、ナイチンゲールは目を逸らした。曖昧に呟く。

「……ええ、まあ」

なぜだかしばし言い淀むように逡巡して、イドもこちらを真似るように視線を逸らす氣配がした。怪訝に思い、入れ替わるように視線を戻してみると、彼女は躊躇いがちにぼそぼそと呟くところだった。

「……ひよつとすると何かな。その夢には私が出てきて、それでお前に嫌な思いをさせるので眠れなくて朝怒つてたとかさういう……」

ひどい勘違いに吹き出しそうになる。ここで笑えるような性質たちなら良かったのだが、生憎そんな仕様ではない。

「違います。眠れない程怖いイド様つてどんな冗談です？」

「なら良かった。夢の中までは責任が取れないのでね」

ナイチンゲールは冷たく告げただけだったが、イドはほっとしたように息をついた。その胸元を両手で押しやって距離を開ける。押されるままに主は素直にこちらの頬から手を放した。

何となくワンピースの襟元を正して——実際には皺ひとつ寄っていないが——咳払いする。今日あてがわれたのは比較的シンプルなデザインだった。光沢のある黒い布地に、銀糸で凝った刺繍が施されている。その花の意匠に話し掛けるような角度で呟く。「私——その、ひとりぼっちみたいな気がして、怖くなる時があるんです。馬鹿げてるとは思いますが。誰も私をいらなくなって、暗い中に放り出されるような」

声色は言い訳じみて響き、それに似て途切れがちだった。長すぎる間を空けてしまったがイドは口を挟んでこない。ただ視線だけは感じる。手の届かない場所から見下ろす月光。観察者の眼差し。

「怖い夢を見たあと、そんな風な、その……妄想が。私の中に発生するんです。夜の間ずっと居座って不快なんです。だから、夢を見たくないな、と思つて」

そのまま、据わりの悪いところで言葉は途切れた。自覚しながらも続きは思い付かず、誤魔化すようにナイチンゲールは服の裾を触った。繊細に織られたトーションレースが複雑な手触りを返す。目を閉じて触れたならば不気味かもしれない。だが目に見える状態な

らば整然と美しい。他者の心を含む、あらゆる事象はそんなものかもしれない。だが実際には、すべてをつまびらかにすることなどできはしないのだ。

(手探りに……触れ合うしか、ないってことなのかしら。少しずつ理解することしか……) 掌の感触を頼りに、少しずつ輪郭を想像してゆくこと。いつか全体像を掴んだとしても、目を開き答え合わせをすることはできない。安らかに全てを信じ切ることはできない。

そんなことを考えていると、しばらく黙っていたイドが口を開く気配がした。視線を上げる。間近で自分を見下ろしていた主は真顔で、ごく近い一点を見ているように上の方にも見える、つまりは何か思案げな面持ちだった。そんな風になっているときの彼女は伶俐で美しい。だが、くだらない冗談を言っただけで笑う顔や、不服を示して子供じみた草で口を曲げたりする顔の方がナイチンゲールは好きだった。理解の光が照らす、ごく狭い範疇から外れた様々なもの。目隠しの触觉を脅かす未知。この顔もそのひとつ。

どこか別の場所からフォーカスを合わせ、この場に帰ってくるような——そんな連想をさせる雰囲気での瞳が微細に色を変えた気がした。その目でじつとこちらを見たまま、慎重に口にする。

「それはつまり、寂しいって事かな」

質問と言うよりは確認で、確認と言うよりは独り言に近いような響きだった。答えなく

てもいいのかもしれない。少し迷ったが、結局ナイチンゲールは曖昧に頷いた。

「……一言で済ませてしまうのなら、まあ、遠くはない言葉かもしれませんけど」

「よし。わかった」

予想しないタイミングで即座に返事が返り、思わず声を上げる。

「え？」

間の抜けた声。虚を突かれた顔も似たような表情を浮かべているような気がした。それを取り繕う間もないうちに、イドははつきりした口調で矢継ぎ早に喋り続ける。

「考えてみるよ。お前が寂しくなくなる方法を。夢を閉ざすより健康的なものがあろうさ。というか、ちょっと今思い付いたからこの方向性で行こうと思ってる。そうしよう」

「な、何がですか。どの方向性ですか？またろくでもないこと思い付いたんですか？何を即決してるんですか。やめてください、ちょっと」

慌てて言いつのるが、イドはまるで意に介さない様子で踵を返した。背を向ける前に見えた瞳が、灯でも入ったように輝き始めているのを見てぎよっとする。あの色はまずい。かなり面白いこと——イド本人にとって、だが——を思い付いたときの兆候だった。

「急で悪いけど出掛けてくる。それ途中なので机の上は触らないように。留守番頼むよ」
「だからそういうのじゃなくて！」

一方的に言い放ちながら、さっさと部屋を出て行こうとする。たまりかねてナイチンゲールはその背中に向けて叫んだ。

「余計なこととはしなくていいんです！馬鹿の癖に馬鹿なこと考えないでいいんですあなたは！何をやる気が知りませんが、そんな面倒なことじゃなくて——」

「緊急時は赤の扉を叩きなさい。わかるようにしておくから」

「話を聞いて下さい！だから何で、今の話でどっか行っちゃうって発想になるのか理解に苦しみますっ！ちよつと、馬鹿、イド様——」

慌てて追い掛ける鼻先で、ぱたん、と無情にドアが閉まった。

「……うっそお」

他にできることもなく、呆然と、呻く。

「何でこうなるのよ」

ひとり取り残され、閉じた扉の前でナイチンゲールは呟いた。その声音は譫言めいて耳に届く。事態に付いていけず、ただ途方に暮れている声。顔付きもきつとそんなものだろうと、客観的に今の自分そのものを意識する。

「何で急にどっか行っちゃうわけ？毎度ながらどんな化学反応が起こったつてのよ……普通に考えてよ……」

独りが怖いとまで言ったのに。何故自分を放置して飛び出していくのか。どんな解決策を思い付いたのかと考えると頭が痛い。実際に頭を抱えてナイチンゲールは力無く扉にもたれかかった。

何をしにどこへ行ったか知らないが、あの様子では、当分帰ってこない気がする。下手をすれば数日。いや、もっとか。

ひんやりとした扉の感触を頬に感じながら、悄然とナイチンゲールは呻いた。

「……一緒に寝てくれたらそれでよかったのに」

「ごめん、忘れ物」

声と同じくらい無遠慮な勢いでドアが外側に開き、力を抜いてそれにもたれかかっていたナイチンゲールは思い切りバランスを崩して、顔からイドの胸の中に倒れ込んだ。うわ、とか何とか言いながら危なっかしくそれを抱き留めて、だからどうということもなく、ぬいぐるみでも脇にどけるような感じでイドはナイチンゲールの身体を押し退ける。部屋に入るにあたって単に邪魔だったらしい。振り向きもしない。

つかつかと大股に机に歩み寄り、もはや堆積したあらゆる地層が崩れるのも構わず道具箱を引っ張り出す。もし机の上に暮らす小人がいたならばこの瞬間に絶滅しただろう。自然災害が起こる経緯を見ているような心地でナイチンゲールは意味のよく解らない納得を

味わっていた。プレートだのマントルだの何だの、難しいことは置いておいて、多分神様が いい加減な性格をしているのが全部悪いのだ。

目的のものを手に提げて、意気揚々とイドは部屋の出口へと戻ってきた。何度となく事態に置いてきぼりにされ、呆然とそこに立っていたナイチンゲールに目を留めると満面に笑みを浮かべる。嬉しそうにイドは手を伸ばし、指先でこちらの頬をつついた。片手が塞がっていなければ、また両手で頬を挟みたかったのかもしれない。そんな顔付きで無邪気に瞳を輝かせ、鼻先まで近寄ってくる。

「面白いことだよ。試してみる価値はある。お前が喜びそうな、個性的な——あ、いや、まだ秘密」

とにかく呆気に取られて、そこまでは黙ってされるままになっていたのだが——彼女が嬉しげに目を逸らしたのを契機に、ようやく追いついた理解が頭の中で缺を振りかざし何かを切った。おそらく堪忍袋の緒とか、そういうものを。

「豆腐の角に頭ぶつけて死んだらいいと思います！会話する気ないでしょう。意味不明なことばかり一方的に喋らないで下さい。行くならさっさと出掛けたらどうです!？」

ほとんど金切り声で叫んで、ナイチンゲールは歯を剥いて唸った。実際に噛み付かれると思っただのか、イドが伸ばしていた指をそつなく引っ込める。

「そうするよ。じゃあ、ちよつと探し物をしてくる。しばしお別れだが、帰るまでに機嫌を直しておいてくれ」

上機嫌の顔のまま、ひらひらとこちらの顔の前で手を振って無茶を言う。一流の魔女は睨みだけで相手を死に至る病に冒すという。そんな気持ちでナイチンゲールは主を睨み付けた。

「あなたが出て行つたら全てのドアに対しバリケードを作ります。それが答えです。わかりますね？ さつさと視界から消えて下さい！」

「わかった、わかった。ああ、そうだいつかみたいに飴玉食べ過ぎないようにね。お腹に虫が湧くよ。では行つてきます」

とうとう蹴飛ばそうと思つてナイチンゲールは足を上げたが、実に良いタイミングでドはさつと身を引き扉を閉めた。意識しての行動ではないだろう。彼女はとにかく鈍いので、普段はやられっぱなしであるのだから。

ガン、とかなりまずい音を立てて身代わりになつた扉が揺れた。堅い木材に踵を食い込ませ、足を上げたまま、今度こそ本当に取り残されてナイチンゲールは腹の底から罵声を上げた。

「お母様の馬鹿!!」